様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２２年　５月１７日現在

研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2007～2009
課題番号：19520324
研究課題名（和文）　現代中央アジア諸国における民族間共通語としてのロシア語の地位に関する比較研究
研究課題名（英文）　A Comparative Study on the Status of the Russian Language Spoken as a Lingua Franca in Central Asian Countries Today

研究代表者
柳田　賢二（YANAGIDA　KENJI）
東北大学・東北アジア研究センター・准教授
研究者番号：90241562

研究成果の概要（和文）：現在中央アジアでリングァフランカ（民族間共通語）として話されているロシア語には話者の母語の系統論的および類型論的差異を越えた共通性があり、このことはそれが以前に一旦ピジン化（言語接触による簡略化）を経て成立したクレオール言語（ピジン化を経て発生した新言語）である可能性を示唆する。他方、中央アジアにおいて民族間・国家間の共通語として機能しうるのは今後ともロシア語のみであり、その必要性にもかかわらず現在のように経済苦に起因する質量ともに劣悪なロシア語教育が続いた場合、それは再び本格的なピジン化に晒される可能性がある。

研究成果の概要（英文）：Russian dialects spoken by various peoples in Central Asia today have certain common characteristics indifferently to genealogical and typological property of their native languages, which suggests a history of pidginization and creolization undergone by the Russian language in this area. On the other hand, there will be no language except Russian which can serve as a common language for all the countries and peoples in Central Asia in the future either. If the Russian language education continues to be so poor both in quality and in quantity in spite of its necessity as it is today as a result of the economic difficulties of Central Asian countries, it may proceed to the “real” process of pidginization.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２００８年度	900,000	270,000	1,170,000
２００９年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：社会言語学、中央アジア、ロシア語、多言語使用、リングァフランカ

１．研究開始当初の背景

研究代表者柳田は 2001～2002 年と 2005～2006 年にウズベキスタンの首都タシケントという典型的な多民族社会における言語使用の実態を観察する機会があったが、この間に同国では当時の親米反露路線に加え学校教育における旧ソ連否定およびロシア語軽視・ウズベク語偏重によるロシア語への反感が年ごとに増大した結果として 2006 年に至っては同市内の若いウズベク人の多数がロシア語を解さぬ者によって占められ、同じくウズベキスタン国民であって同じ市内に住みながら共通語を持たず相互に話の通じない住民が明らかに増えていることが観察された。同市内に住む非ウズベク人住民、特にロシア人のほか比較的若い世代のタタール人や朝鮮人の住民はロシア語の単一言語話者であって学校でウズベク語を学ぶ機会すらなかったのであり、最大民族であるウズベク人の若い世代がウズベク語単一言語話者となればそのような結果が導かれるのは自明のことであるにもかかわらず同国政府がこの時点では民族間共通語としてのロシア語の必要性から目をそむけていたことによりこのような事態が招かれたのだと言うことができる。さらに、独立後現在まで一貫して強力な大統領独裁政権下にあるウズベキスタンにおいて、このような言語政策から、当時ロシア語による出版は全くと言ってよいほど行われなくなっていた。

一方、2005～2006 年には柳田はキルギスの首都ビシュケクにおいてもロシア語の使用状況を観察する機会を持ったが、この時点においては、ビシュケクとタシケントの間には大きな差異が見られた。ビシュケクもタシケント同様に多民族社会であるが、そこに居住する全民族の共通語としてロシア語が衰えることなく使われており、さらに、最大民族であるキルギス人の若い世代をも含め、ビシュケクの一般市民が話すロシア語はタシケントのそれに比べて明らかに規範的ロシア語に近いと言うことができたのである。このことは当時のキルギス政府がウズベキスタンと比べてはるかに民主的であると同時に米露の双方と友好関係を持ち、なおかつウズベキスタンのように優勢民族の言語であるキルギス語を全国民に押しつけようとするといった現実無視の言語政策を採らずにキルギス語を「国家語」としながらもロシア語も「公用語」と認めてキルギスの全国民に共通に理解されうる言語としてのロシア語の地位を積極的に認め、ロシア語での出版も盛んに行われていたことによって説明される。

2006 年秋の本科研費研究計画調書作成段階でのウズベキスタンとキルギスのロシア語をめぐる状況はおよそ上記のようなものであった。他方、この時点において柳田はカザフスタンへの渡航歴がなく同国におけるロシア語の使用状況に対する具体的観察の経験はなかったが、同国ではロシア人の人口比率がウズベキスタン・キルギスの両国と比べてはるかに高く（2005 年現在ウズベキスタン 5.5%、キルギス 12%に対してカザフスタンは 30%＝いずれも 2006 秋当時の日本外務省 HP による）、さらに「カザフ語は国語。（ロシア語は公用語）」（同じく当時の日本外務省 HP による）との位置づけを行っており、またこの当時のカザフスタンにおけるカザフ民族主義と大統領独裁化もさして目立たなかったため、同国におけるロシア語の地位はウズベキスタンよりもキルギスにおけるそれに近いことが予想された。

なお、中央アジアには上記３国の他にトゥルクメニスタンとタジキスタンという２つの国家が存在するが、2006 年時点では前者は自らを「トゥルクメンバシ」（トゥルクメンの首領）と呼ばせる故・ニャゾフ前大統領による常軌を逸した個人崇拝を伴う「北朝鮮型独裁制」にあって外国人学者による調査旅行などは一切不可能であり、またタジキスタンは日本からのアクセスが極めて悪い上に日本で査証を取ることすら不可能な状態にあったので、本科研費による研究対象から外した。

２．研究の目的

(1) 2006 年までに行ったタシケント近郊の旧高麗人コルホーズ”Politotdel”（「高麗人」は 1937 年に極東から中央アジアに強制移住させられた朝鮮人の自称）における 1937 年前後生まれの朝鮮人２世やビシュケク近郊のドゥンガン人集居地域である Aleksandrovka 村でのドゥンガン人、さらにはサマルカンドのタジク人の言語使用に関する観察を通じて、いずれの場合もロシア語は自民族語や、さらにはその地域の優勢言語（サマルカンドのタジク人の場合はウズベク語）との頻繁な２～３言語間コードスイッチングという文脈の中で用いられるのが常態であり、たとえ外見上ロシア語だけを話しているように見えても、実はそのパロールは自民族語のシンタクスに従ってロシア語の語を配列したものに過ぎないということさえも頻繁にあり得ることを確認していた。

またそれと同時に、これら中央アジアのロシア語は恒常的に言語接触の中に置かれて

いるため、そこで話されている口語ロシア語には、特にシンタクスのレベルにおいて、話者の母語が現地民族語のうちのいずれであるかを越えた特徴がある可能性について柳田は 2006 年時点までの観察で思い至っていた。より具体的に言えば、自民族語が系統論的にも類型論的にも全く異なる朝鮮人、ドゥンガン人（ドゥンガン語は中国語北方方言に由来する言語であり、ドゥンガン人は自らを中国の回族と同族と考えている）、タジク人（タジク語はインド・ヨーロッパ語族のインド・イラン語派に属する言語であり、互いに話が通ずるほどペルシャ語と近い関係にある）が話すロシア語のシンタクスに共通の非規範ロシア語的現象が現れるのである。これは、この地域でリングァフランカ（民族間共通語）として話されているロシア語とは実は 19 世紀以来続く現地諸言語との接触によって一旦ピジン化し、ソ連時代の学校教育における強力なロシア語化によって「矯正」され続けたとはいえ、多民族社会である中央アジアにおいて現地諸民族が日常的に話すコードスイッチング言語の重要な構成要素としてクレオール化したものである可能性を示す。本研究課題においてはこのように話し手の民族および母語を越えて共通した特徴を持つ「中央アジアロシア語」について、特に３国各々の優勢民族であるウズベク人、キルギス人、カザフ人を主対象として観察することをその主眼の一つとした。

(2) 2002 年以降、ウズベキスタンでは旧ソ連に全面的に否定的評価を与える動きが現政権によって強められており、ちょうどこの年にタシケントに小規模ながら「抑圧犠牲者の博物館」なる施設が作られたことがそれを象徴している。政府のこの動きに伴って「脱ロシア化」と「イスラム回帰」の動きが顕著になったことの他に、2005～2006 年の観察では、それ以前には全く存在しなかった「ロシア語への反感」が若い人々の間に芽生えていることが確認された。2007 年からの３年間にわたってタシケントの若い人々、具体的には学部学生たちの言語使用の変化を観察・分析することは、恐らく同国での急速なロシア語衰退の過程を記録することになるであろうと考えられ、これを現実的な言語政策を採っていたキルギスおよびロシア人比率が同国の６倍にのぼり、同じくロシア語が「公用語」と認定されているカザフスタンにおける同世代の人々のロシア語使用と比べることは、この時点で行わねばもはや不可能となるであろうと考えられた。

「ウズベク語公用語化・ウズベク語偏重」に加えて「ロシア語軽視ないし敵視」という当時のウズベキスタンの言語政策とは、アフリカの多くの国々が多民族国家であるがゆえに、少数民族の反発を避けるために独立後の公用語をあえて優勢民族の言語ではなく旧宗主国の言語である英語や仏語にしたという経験に反する「実験」とでも呼ぶべきものであって、その結果を後になって評価する上で本研究による調査資料と分析結果は重要なものになりうると考えられた。

(3) さらに、我が国におけるロシア語履修者数は 1980 年代のペレストロイカ期からソ連崩壊直後までの一時的な急増期が過ぎ去って以来低迷を続けているが、中央アジアにおいてロシア語が今後とも唯一の「民族間・国家間共通語」として存在し続けられるか否かは、例えて言えば中央アジアにおけるロシア語が中南米におけるスペイン語に近い地位を獲得するか否かという問題であるということすらでき、我が国におけるロシア語教育の地位を考えるにあたっても決して軽視できない事項であると考えられた。

３．研究の方法

上記(1)については、まずは毎年欠かさずタシケント、ビシュケク、アルマトゥ（カザフスタンの現在の首都はアスタナであるが、これは近年の人工都市であるので敢えて旧首都であるアルマトゥを対象とした）を訪れ、なるべく長い時間現地の人々とロシア語で会話をして現地の人々が話すロシア語の特徴を記録し、状況の許す限り録音するということを行った。さらに、ビシュケクとアルマトゥについては日本関係の仕事をしているウズベク人青年（タシケント工科大学卒のインテリであり、必要があればウズベク語単独でもロシア語単独でも会話ができるが、自分の姉との間でさえウズベク語・ロシア語コードスイッチング言語を日常的に用いている）にコーディネーターとして同行してもらい、柳田自身を含め３民族が同席して会話をする場面を必ず設定した。これには、同じチュルク系言語を母語とするウズベク人とキルギス人やカザフ人が会話をする際にロシア語ではなく互いの母語同士を用いるということがあるかどうかを観察するという目的もあった。なお、当初の計画では１回の出張でウズベキスタン、キルギス、カザフスタンの３国を回ることを予定していたが、隣国間の越境であっても国境を越えての移動には予想外に多くの手間と時間を要することが判明し、現地研究の時間を確保することを優先するためにはこれは事実上不可能であると判断せざるを得なかった。そのため、2007-2009 の毎年９月にウズベキスタンとキルギス、毎年 12 月の年末近くにアルマトゥを訪れることになった。(2008, 2009 年には本科研費の配分額で 12 月のカザフスタン訪問を実現することは不可能だったので、運営費交付金による個人研究費でこれを行った。)

その他に、現地調査時以外には西欧語基盤

のピジン・クレオール諸語に関する文献を読み込み、また、ロシアで出版された社会言語学に関する優れた研究書である Бельков В. И., Крысин Л. П., *Социолингвистика*, 2001, Москва を精読したが、このことによって「ピジン・クレオールの再ピジン化」および「ピジンの可塑性」とそれによる「限定ピジンにおける語彙入れ替え」という現象の可能性に着目することができた。特に、かつてバレンツ海に存在し、かなり多くの語や文例の記録が残っている唯一のロシア語基盤ピジンとして有名な「ルッセノルスク」に関する詳細な描写が上掲書にあったことは、中央アジアで現在話されている口語ロシア語の性格とその未来について考えるために大きなヒントとなった。

上記(2)については、タシケント東洋学大学、キルギス民族大学、カザフ国立民族教育大学およびカザフ国立民族大学の日本語教員の協力を得ることができ、その各々でロシア連邦教省認定国家試験「ロシア語検定試験（ＴＲＫИ)」（ロシアに留学する学生が受験を義務づけられている試験。日本でも行われているが、旧ソ連諸国の学生はこれと同じ試験を受ける義務はなく、中央アジア諸国では行われていない。ロシアの大学院に入学するためには少なくとも第３レベルの語学力が要求される。問題文等においてもロシア語以外を一切使わないロシア語検定試験であり、外国人のみを対象とするにもかかわらず異常に要求水準が高いことが我が国のロシア語教員間でよく知られている）の試行問題のうち文法に関する択一式試験問題を７人から15 人程度の学生に課し、解答を持ち帰った。

４．研究成果

(1)について、高麗人を主対象とした 2001～2002 年およびドゥンガン人を主対象とした 2005～2006 年のタシケント・ビシュケク調査で副次的に得られた現地のチュルク系諸民族やタジク人の口語ロシア語の特徴に関するデータに加えて 2007 年、2008 年の現地調査において得られたウズベク人とキルギス人による口語ロシア語パロールに関するデータを加え、さらに、上述の文献解析によって得られた西欧語基盤ピジン・クレオールの発達過程、特に「再ピジン化」と「ピジンの可塑性」による「語彙入れ替え」という現象に関する知見によってこれらの現地収集言語資料を分析することを試みた。この成果は、下記 2009 年論文としてまとめ、部局紀要論文として公刊した。

(2)について、当初計画では ＴＲＫИ のうち最上級の第４レベルまたはそれに次ぐ第３レベルの試験を課すつもりであったが、2007 年９月にタシケント東洋学大学とキルギス民族大学の日本語教員にこれらを見てもらったところ「私にでさえ難しい。自分はロシア語が良くできると思っていたが自身を失った」という意外な反応があったので、さらに下の第２レベルの試験のうちの文法問題のみを課すことにした。「ロシア語検定試験（ＴＲＫИ)」の筆記試験には読解問題もあるが、これについては、日常的にロシア語を読んでいる中央アジアのロシア語話者にとっては第３レベルであっても「全く簡単である」との感想を得たので、学生に課すことを避けた。

第２レベルの文法問題は、日本のロシア語教育に置き換えれば、ロシア語を専門とする課程の学部４年生に対応する程度の形態論に関するものである。まず、ここで記したこと自体が、ロシア語で日常的に授業を行い、論文を書いている現地民族の大学教員でさえロシア語の形態論にかかわる細部を尋ねる問題に対して、感覚的かつ直ちに正しい選択肢を択ぶことができるという水準に至るまでロシア語を把握しているわけではないということを示す。ところが、その同じ人々が、日本人にとっては読んで意味を把握することに多大の時間を要する読解問題については全く困難を感じないのである。これは、現地の人々にとっての受動的ロシア語理解力とは必ずしも形態論に関する正確な知識を要求するものではないことを示唆する興味深い現象である。他方、学生による ＴＲＫИ の解答の精査による若い世代のロシア語の変化についての分析は思いのほか時間がかかり、現時点ではまだ完成していない。これについては、下述の 2009 年調査で得られた知見とともに本年夏のうちを目途に論文を執筆し、何らかの形で公刊する予定である。

本科研費課題の研究計画調書を作成した 2006 年と現在とでは、ロシア語をめぐる現地の状況も大きく変化している。2001～2005 年の間にウズベキスタンで急速なロシア語離れが起こったのは独立語現在まで続いている独裁政権が多民族・多言語国家という同国の実態を無視してウズベク民族主義を国家統合の原理として採用した上にソ連時代のキリル字から強引にラテン文字化したウズベク語を公用語として採用し、さらにウズベク人が通う学校におけるロシア語教育を極度に縮小し、同時にソ連全面否定の教育を強めたのみならず、他方では 2001 年の米国同時多発テロ以来米軍基地を受け入れて親米反露路線を採ったために優勢民族たるウズベク人の若い世代が強い反露感情を持つに至ったためであった。

しかしながら、2005年のアンディジャンでの住民虐殺事件を契機に同国と米国の関係が悪化し、同国は駐留米軍を追放するとともに再び親露路線を採るようになり、ウズベキスタン国民の対露感情もそれにつれて変化した。より具体的に言えば反露感情自体は一時期に比べてかなり減少したと言うことができるものの、若いウズベク人のロシア語力の低下は相変わらず続いており、現在、その原因は国民の反露感情ではなく別のところ、即ち同国の置かれた経済苦に求められるのである。2008,2009両年に複数のタシケントの大学教員から聞いたところでは、かつてのウズベキスタンにはロシア人ではなく現地民族であっても有能なロシア語教師が多くいたが、学校教師の収入があまりに低いため有能な人々であればあるほど教職を去り、ロシア語教師の数自体が不足しているのみならず、質的にも低下が著しいということなのである。また、キルギスに関しても全く同じ内容の話をビシュケクの日本語教員から聞いた。

ソ連崩壊直後のみならずこの５年間だけをとってみてもタシケントやビシュケクでは街を歩く人々に占めるロシア人比率が減ったことが明らかに見て取れる。そして、この３年間に限った場合には、特にビシュケクでロシア人を見る機会がめっきりと減った。これは今年2010年４月の民衆蜂起によって退陣したバキエフ前大統領による経済政策の失敗に帰せられる事態である。この経済失政のため同市では年を追うごとに活気がなくなり、ロシア人のみならずキルギス人自らまでもがロシアとカザフスタンに移住するために同国を去りつつあるのである。

2009年秋のタシケント調査時にウズベキスタン東部フェルガナ州出身の若いウズベク人大学院生と知り合う機会があり、フェルガナ州におけるロシア語の現状について聞く機会があったが、それによれば、現在の経済苦とそれによる教師不足により同地では甚だしくロシア語教育の質が下がって若い人々はロシア語を解さなくなっている。しかし、ロシア語を解さない者は大学での勉学においても職業生活上も不利であることを彼ら自身が自覚したため、同地にロシア人が設置した「ロシア語センター」なる組織が行うロシア語講座に学習希望者が殺到しており、「ロシア語センター」ではその全員を受け入れることができずに困っているとのことであった。上記事実は若い世代の現地民族住民の意識内で一時期の反露感情に由来するロシア語への反感が弱まっていることを明らかに示す現象である。またさらに、これについては、ソ連否定の強力なプロパガンダを行っていることはウズベキスタンのみならずロシア自体でも同じであるため、現在では「反ソ」が「反露」に直結しなくなっていることにその原因の一端を求められる可能性もある。

なお、2009年調査について特筆すべき成果としては、ウズベキスタンに生まれ育った30歳代のタシケント在住ロシア人であってなおかつロシア語単一話者でありながら、ロシアへの入国歴が１回もないロシア人インフォーマントに出会うことができたことが挙げられる。上述の通りウズベキスタンでもキルギスでも長引く経済不振のため現地生まれのロシア人が次々とロシアへ去り、ロシア人人口自体が大きく減っている。そうした状況下でこのようなロシア人の知己を得ることは現在極めて難しく、現地で話されているロシア語方言の単一言語話者の談話を記録する必要を感じながらこれまで実現することができなかったという経緯があるだけに、これは貴重な収穫であった。

このロシア人インフォーマントに対して柳田自身がこれまでに観察したウズベク人等現地民族のロシア語に共通に現れるシンタクス上の非規範的現象を含む例文を読み聞かせたところ、そのほぼ全部に対してロシアのロシア人のような露骨な嫌悪感を示すということなく、しばらく考えてから「私ならこう言う」として合規範的なロシア語文を示すという反応が見られた。この反応は現地諸民族ともロシアのロシア人の反応とも明らかに異なるものであり、極めて注目に値する。ここで柳田がこのロシア人インフォーマントに示した文とは、例えば、

Я если поеду в Москву, буду проживать в самой дорогой гостинице.

(I if go to Moscow will stay at the most expensive hotel.)

のように、従属接続詞の位置が規範ロシア語と異なるが、中央アジアではごく普通に見られる語順によったものである。もしも現地在住のロシア人にとってさえこのような語順がこの地域の口語においては「一般的であり、誤りではない」と評価されているのであれば、これはこの地域のロシア語が一旦ピジン化を受け、それがクレオール化したものである可能性を示す証拠となりうる。

そこで、柳田としては、2010年度以降も何らかの資金を使ってタシケントを訪れ、このロシア人のような典型的「中央アジアロシア人」のインフォーマントに対する聞き取り調査を継続したいと考えている。

柳田としては、中央アジアのロシア語のピジン化について、ソ連時代を通じてピジン化の芽はあったが、学校での強力なロシア語教育によって辛うじてそれが抑えられていたのだろうと考えている。現在中央アジアでリングァフランカとして話されているロシア

語には2009年論文で分析を試みたような話者の母語の系統論的および類型論的差異を越えた共通性があり、この事実はそのようにしか説明し得ないと考えられるからである。
　そして、今後の学校教育の推移によっては、より具体的に言えば現在のような質量ともに貧しいロシア語教育が続いた場合には、このたがが外れ、再度、語の完全な不変化化と現地諸言語（その多くはチュルク系言語である）の語順に従った語順の固定化という「真正の」ピジン化が進む可能性があると考えられるのである。

　最後にカザフスタンの状況について触れねばならないが、本科研費による調査旅行が最も行いにくかったのがカザフスタンであることをまず記さねばならない。カザフスタンは「面積大国・資源大国」であり、2002年頃からの急速な経済成長によって国民の所得水準も大幅に向上した。しかしながら、それが直ちに土地バブルを生んでしまい、さらに現在ではそのバブルが崩壊して1990年代の日本に似た型の経済不況の中にある。そのため、同国では物価が明らかに日本よりも高く、ウズベキスタンやキルギスと比べると２倍から５倍程度にもなるため、ウズベク人コーディネーターとともに安全な安ホテルを探して数日間滞在するだけでも相当な予算上の困難に直面するのである。加えて、カザフ人はウズベク人やキルギス人のように日本人に対して親切ではなく、３回アルマトゥに往復しても元大学日本語教員であった１名を除きカザフ人とはうち解けることができなかった。このため、カザフスタンのカザフ人の口語ロシア語についてはごく僅かしか録音資料を持ち帰ることができなかったが、しかし、その僅かの録音資料のうちにも他の両国の住民による口語ロシア語と共通の特徴が見られそうなので、大学で行ったＴＰＫИに加えてこれについて今後分析を行う意向である。
　また、カザフスタンの言語政策について付言すれば、かつては民主的であり、かつ民族主義的色彩の少なかった同国でも経済成長とともに大統領の独裁化とナショナリズムの増大が見られ、現在ではカザフ語のラテン字化の計画も出されている。つまり、独立直後にウズベキスタンが行ったのと同じ無謀な言語政策が今後行われる可能性があるということをここで指摘しておかなければならない。
　実際に現在のアルマトゥではロシア語よりもカザフ語を耳にすることの方が多いが、他方、カザフ人が少なくロシア人人口の多い北部にある現首都アスタナではほとんどロシア語ばかりが用いられるということを現地で聞いた。同国は他の２国に比べてはるかに広大な国であって、そこにおける多様性も他の２国に比べて大きいのも当然であるので、残念ながら、本科研費による調査をもって同国におけるロシア語の将来について予測することは難しいと言わざるを得ない。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計１件）
① 柳田賢二、ピジン・クレオール言語とコードスイッチングおよび中央アジアのリングァフランカとしてのロシア語について、東北大学東北アジア研究センター『東北アジア研究』、査読有、第13号、2009、29-56

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
柳田　賢二（YANAGIDA　KENJI）
東北大学・東北アジア研究センター・准教授
研究者番号：90241562

(2)研究分担者
（　　）
研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）
研究者番号：